

「SDGs 関連の取組事例調査」報告書

— 信州ミルクランド株式会社の事例 —

調査実施日：2023年2月13日(月)～14日(火)

調査担当者：本郷、尾崎

調査先：信州ミルクランド株式会社

応対者：丸川社長、滝本専務、町島工場長、林管理部部長補佐

1 会社概要

- ・所在地：長野県松本市
- ・設立年月：1997(平成9)年12月
- ・出資金：1億円
- ・役員：役員4名
- ・従業員：123名
- ・売上高：約78億円(牛乳のうち学乳が2割弱)
- ・生乳受入量：約2万7千トン
- ・営業範囲：主に関東、東海・北陸地域(コンビニ取扱商品は全国展開)
- ・取扱構成：牛乳約6割、はっ酵乳約4割



○ 信州ミルクランドの沿革

乳業、とりわけ地方乳業には、牧場経営から出発して牛乳乳製品の製造・販売部門にも進出して発展的に経営を拡大してきたケースが多い中で、信州ミルクランドは設立の経緯も経営形態も極めてユニークな存在であるといえる。

同社は1997年に設立されたばかりの極めて新しい会社である。国の「乳業再編整備等対策事業」を活用し、長野県内の3工場(協同乳業(株)松本工場市乳部門、長野県農協直販(株)中野工場及び上小牛乳(株))を統合して1999年に工場稼働を開始した。一般的な企業再編のように、1社が他の2社を吸収したとか、3社が合併したというわけではなく、3社の牛乳等の製造部門だけを統合し、流通・販売部門は3社が存続のうえ経営を継続するという形態をとっている。言い換えると、信州ミルクランドは、3社からの製造委託により牛乳等の生産を



行うことだけが目的の会社であり、収益の源泉は基本的に牛乳等の製造受託による加工代だけということになる。

このような工場部門のみの統合は配合飼料メーカーでは珍しくなくなっているが、乳業メーカー間で行われる例は少ない。当協会においては、Jミルクのいわゆる「提言」を受けて、2020年度に乳業メーカーの共同出資による乳製品工場の設立について検討した経緯があるが、実現のための課題は数多く見いだせたものの、具体的な検討に着手することなく検討は終了している。

○ 現状

上記のような工場設立の経緯を背景として、信州ミルクランドは3社の工場において製造されていた牛乳やヨーグルト等の生産を継続するため、現在、1工場で約120アイテムもの製品を生産している。工場の統合による製造コストの低減を図る上で、製造アイテム数の削減は重要な課題であるといえるが、3社がそれぞれ存続して販売・営業活動を継続している以上、やむを得ないものと考えられる。また、3工場における牛乳等の生産を継承しているため、生乳処理量は2.7万トンと長野県で生産される生乳の約30%となっており、学校給食用牛乳のシェアに至っては70%以上と県内の大部分を占めている。

ただし、設立目的の1つと考えられる効率的な牛乳等の生産により製造コストの削減が図られるため、生産単位当たりの温室効果ガスの排出は抑制されているものと考えられる。したがって、このような共同工場自体が、SDGsに貢献している生きた事例であるともいえる。

2 SDGsに関連した取組(調査結果)

1) 環境負荷軽減のための取組

(1) 廃棄物関連対策

① 廃棄物の削減：ビン利用によるリユースの推進

長野県ではビン入り牛乳が推奨されていることから、学校給食用牛乳の9割はビン入り牛乳となっている。1ビン当たり30回まで利用できるように取り組むことにより、廃棄物の削減に貢献している。



② 環境への配慮：生分解性ストローの利用

受託製造を行っているため販売会社の判断ではあるが、発酵乳などの一

部に生分解性プラチックストローを利用している。4月からは、200ml入り牛乳にも利用を拡大する予定となっている。

③ 食品ロスの削減：飲用向け製品の再利用

信州ミルクランドは流通・販売部門を持たないため、基本的に受託生産して出荷した製品の販売ロス等についての責任は負わない。他方、製造過程で発生した飲用製品のロス(オーダーとの差)等については、乳飲料等に再利用することにより食品ロスが発生しないように取り組んでいる。

④ 資源循環の推進：発酵乳廃棄物の飼料としての再利用

発酵乳については、飲用製品と異なり再利用が困難であることから、工場外のタンクに一定期間保管し、長野県内や千葉県の養豚農家向けに飼料(リキッドフィーディングの原料)として販売している。このため、飼料販売業の許可も取っている。

⑤ 廃棄物のエネルギー源としての利用

信州ミルクランドに隣接してエネルギー関連企業の工場が立地しており、同社は、2022年10月下旬に地産地消エネルギーによる資源循環モデルの開発施設「地球の恵みファーム・松本」の建設に着手している。地球の恵みファーム・松本は「バイオマスガス化発電」「メタン発酵発電」「スマート陸上養殖プラント」「スマート農業ハウス」の4施設で構成され、



地域で発生する未利用バイオマス資源を有効活用して発電を行うとともに、発電時に発生する熱や炭酸ガス(二酸化炭素)を養殖設備や農業に利用することが計画されている。

同施設との話し合いの中で、バイオマス発電の原料として信州ミルクランドの工場が発生する廃液を提供することが検討されている。未利用資源からエネルギーを獲得し、排出される廃棄物を最小化することにより、エネルギーの地産地消と資源循環モデルの実現に貢献することが期待される。

(2) エネルギー対策

① 二酸化炭素排出量の削減：照明の LED への切り替え

工場内及び事務所内の全照明を蛍光灯から LED に段階的に切り替えてきたことにより、省電力化を図っている。



LED 照明

② 二酸化炭素排出量の削減：重油から LNG への切り替え

2019 年 12 月からにボイラー燃料を重油から液化天然ガス (LNG) に切り替えている。また、蒸気システムは LNG を燃料とする貫流型小型ボイラーを台数制御し、省エネルギー化を図っている。

なお、この LNG については、隣接したエネルギー関連工場が東京ガスから供給を受け、そこからパイプラインをつないで購入している。



ボイラーとパイプライン

③ 二酸化炭素排出量の削減：コンプレッサーの制御

空圧についてもコンプレッサーを台数制御し、省エネルギー化を図っている。

④ 地球環境の保護：圧縮機(冷媒)の入れ替え

工場設立後に圧縮機を全て入れ替えている。この結果、冷媒がオゾン破壊係数ゼロの HFC に切り替わるとともに、省電力化による二酸化炭素排出量の削減にも寄与している。



圧縮機

⑤ 夜間電力の有効活用

冷却水は夜間電力を利用したアイスバンク方式を採用し、エネルギーの効率化を推進している。具体的には、夜間電力で氷を作り、昼間に冷却水として利用している。

(3) 水関連対策

① 節水の取組：普段の努力

工場用水には井戸水を使用しており、製品生産の順番を考慮して洗浄の回数を減らすなどの節水の努力をしている。

② 排水負荷削減の取組：残乳の回収

多様な乳製品を生産するため、残乳を回収して調乳に利用することにより、排水施設の負荷を少なくしている。

2) 地域への貢献

(1) 地域の活動等への寄付・協賛

自動販売機での売り上げの一部の子供病院への寄付、花火大会への協賛、高校のクラブ活動への寄付、国の重要文化財に指定されている大宮熱田神社等地域寺社の祭事への寄付等により、地域に貢献している。

(2) 食育への貢献

地域の交流起点として、年間 1400～1500 人の小学生の社会見学を受け入れている。また、地域の教育委員会の後援により作成されている安曇野市の社会科の教材「私たちの街の社会見学」の中で、食品工場の代表として安全・安心な牛乳等を生産している様子が図説入りで紹介されており、食育に貢献している。

小学生への対応のほか、一般の団体による見学者も受け入れ、PR 室でのビデオ鑑賞や見学通路から牛乳等の製造工程を確認いただくことにより、栄養豊かな牛乳乳製品の普及・啓発に努めている。



工場見学に来た小学生からのお礼の手紙

(3) アンテナショップを活用した地産地消の推進

2010年6月に、工場の入り口付近に地産地消を目的としたアンテナショップ「ほっとミルク」を設置している。アンテナショップでは、工場生産された3社の製品に加え、信州産生乳を使用したソフトクリーム、3社製品詰合せ、長野県農協直販信州産肉製品、信州産酒類等を販売している。

また、年1回のイベントとして、地元の消費者に工場の見学通路を開放し、酪農や牛乳製品に対する理解醸成を図っている。例年5月の土日の2日間を充てて開催しているが、工場稼働している中で4,500人もの来場があったため、ほっとミルク会員に対してハガキで通知するだけにとどめている。販売業務を行っていない当社にとっては、若い社員が一般の消費者と交流する貴重な機会ともなっている。

さらに、「市民歩こう運動」のウォーキングルートの中継所として提供し、市民の健康増進にも貢献している。



アンテナショップ「ほっとミルク」



地元との交流イベント

(4) 持続的農業への貢献

農業に馴染みのない若手従業員対策も兼ねて、工場から約100kmも離れた信濃町の遊休農地を借りて信州名産のトウモロコシの生産を行っている。播種から収穫までの費用は自弁し、8人程度の集団で2週間に1回程度除草を行うのが恒例の作業となっている。



遊休農地でのトウモロコシ生産

(5) その他の事情

牛乳等の販売は行っていないため、フードバンク等への牛乳等の提供を行うことはできない。また、受託製造専門の工場(会社)であるため、従業員は工場内作業用の白い服装を着用しているため、工場外に出て清掃活動

を行うような対応は考えていない。ただし、視認した限り工場の構内はもちろんのこと、工業団地内にあるためか工場の周辺にもごみが落ちているようには見られなかった。

3) 働きがいのある職場づくり

(1) 健康経営優良法人 2022 に認定

経済産業省では、健康長寿社会の実現に向けた取組の1つとして、従業員等の健康管理を経営的な視点で考え、健康の保持・増進につながる取組を戦略的に実践する「健康経営」を推進しており、信州ミルクランドはこの「健康経営優良法人」の認定法人となって3年目となっている。

健康経営優良法人制度とは、特に優良な健康経営を実践している法人を「見える化」することで、従業員や求職者、関係企業や金融機関などから評価を受けることができる環境を整備することを目的としたものである。評価基準に基づく認定要件をクリアする必要があるため、長野県内のJA関係では信州ミルクランドだけが認定されている。



健康経営優良法人 2022 認定証



健康セミナーの開催

(2) 施設内完全禁煙の実施

職員の健康のため、工場及び事務所内いずれでも禁煙としている。ただし、屋内及び屋外の3か所に喫煙場所を設置することにより、喫煙者の要望にも応えている。

(3) ジェンダー格差等への対応

女性従業員の割合は約25%である。事務所だけでなく、工場内でも女性が勤務しているため、男女間の格差のない施設・労働条件で勤務している。また、永住権を持つ外国人や高齢者の雇用も行っている。

(4) 障がい者の雇用

障害者雇用率制度に基づけば、障がい者は2名の雇用となるところ5名を採用して現場で業務に従事している。既に4名は5年以上定着しているた

め、無期雇用となっている。その他、障がい者施設と契約し、共有部分の清掃業務に従事していただいている。

4) 長野県 SDGs 推進企業としての登録

2022年7月、信州ミルクランドは長野県SDGs推進企業登録制度、第13期(登録期間:2022年7月29日~2025年7月28日)に申請し登録されている。これは長野県が独自に創設したもので、経済団体、金融機関、大学等支援機関と連携し、「環境」、「社会」、「経済」の3側面を踏まえ、企業等が経営戦略としてSDGsを活用することを支援する制度である。具体的には、人権・労働、環境、公正な事業慣行、製品・サービス、社会貢献・地域貢献、組織体制に係る42のチェックリストについて、必要事項を記入のうえ申請し、具体的なアクションを進める登録制度である。



長野県 SDGs 推進企業登録証

信州ミルクランドは、このような制度に登録することにより、SDGs 関連の取組を推進していく方針を明らかにしている。

3 まとめ(調査を終えての感想)

冒頭にも記載したとおり、信州ミルクランドは長野県内の3社の3工場を統合して設立され、流通・販売部門は3社が存続のうえ経営を継続するという形態をとっているため、牛乳等の製造部門のみを専門的に行うユニークな会社である。流通・販売部門を持たないため、常識的に考えれば、SDGs 関連の取組を通じて企業価値を高め、製品の販売促進を図るといったようなインセンティブは働きにくいものと考えられる。

しかしながら、信州ミルクランドでは、上記のとおりSDGs 関連の様々な取組を行っている。地域に密着した様々な活動が、地域への貢献を通じて地元の方々や自治体の信頼を得、それが回りまわって信州ミルクランドの企業価値を高めているだけでなく、同社で働きたいと考える人材の確保にもつながっている。

このような同社の取り組みは、健康経営優良法人2022に認定されていることや長野県SDGs推進企業として登録されているように、公的な機関からのお墨付きにより裏打ちされている。受託製造専門という受動的な立場でありながら、牛乳等の効率的な生産を目指すとともに、地域に溶け込み信頼される企業であろうとする



努力が、知らず知らずのうちに SDGs に関連する取り組みを進めることにつながっている。

SDGs との関連は薄いですが、秋葉原駅ホームにあるミルクスタンド及びミルクショップ酪で開催された牛乳総選挙で、6 県代表のビン入り牛乳の中から長野県代表の酪農家限定「信州安曇野牛乳」が 5 連覇したとのことであり、社員のモチベーションの向上にもつながっている。

以上